

宏智広録考

石井修道

はじめに

中国曹洞宗の研究は宇井伯寿博士の『禅宗史研究』等で系譜を追って人物の研究がいく人かなされているが、中国曹洞宗という立場で特色ある人物が明確にされてはいないし、その思想史の研究は非常に困難な問題をかかえている。中国曹洞宗といえば初期の洞山・曹山をはじめとする初期の曹洞教団の人々の次に、最も問題にしなければならないのは、一般に宏智等の宋代の禪者を置いて外にあるまいと思われる。それは最も臨濟的とされる大慧宗杲と比べて論ぜられるからである。今回はそこで宏智正覚の研究の基礎的な問題を取り扱っていくことにする。

ところで宏智正覚を問題にすると、まずその伝記が問題と

なる。宇井博士の『第三禅宗史研究』所収の「投子義青との以後の法系」と題する論の中で、一、投子義青、二、芙蓉道楷、三、丹霞子淳、四、真歇清了、五、天童宗玆、六、雪竇智鑑、七、天童如淨がとりあげられ、三の中に天童正覚の伝が収められている。しかしながらこの中では「隨州大洪山十方崇寧保寿禪院第四代住持淳禪師塔銘並序」と「隨州大洪山崇寧保寿禪院十方第二代楷禪師塔銘」(湖北金石志卷十)や「天童大休禪師塔銘」と「雪竇足庵禪師塔銘」(攻媿集卷百十)等の第一次資料も全然使用せず、まして他の多くの同時代の禪者の資料を使用しないで書かれたこれらの伝記は非常にあいまいにされたままとなっている。これらの点に関しては別の機会にあらためて全面的に考察してみたい。

次に宏智正覚を問題にすると、最も意を注がなくてはならないのは彼自身の言行の記録の『宏智広録』についてで

ある。『宏智広録』の研究は、早い時期に中国では失なわれ、日本においても江戸時代になるまで出版の詳しい事情がわからなかつたこともあるて、原初形態の記録が不明のまま進んできた。ここに今回問題にしていこうとする中心課題がある。幸いに道元の将来とする『宏智録』六巻が大分県の泉福寺（以下泉福寺本と称す）にあり、この著の分析を通して解決して行きたい。泉福寺本の本格的な研究は、今までにく、わずかに青竜虎法氏に「高祖将来の宏智録に就て（上）

・（下）」（「禪學雜誌」第二十二卷・第五号・第六号）の紹介

まず便宜上一覧表をかかげることにしよう。

論文があり、今後の研究課題とされていた。交通の便や秘蔵のために研究が進まなかつた理由もあるが、今年の夏休み実際に拝覧の機会を得、また小坂機融先生が以前に撮影された複写版を借用したので、日頃疑問にしている点を述べてみたい。

宏智広録の開版について

番号	外題	刊行年	次	巻数	開版者	所蔵者	備考
一	（宏智録）	宋紹興二十七年（一一五七） 慶元二年（嘉泰元年一二九七）	6	悟智	遷宣	泉福寺	「普門院目録」
二	（天童覚和尚語録）	宋（慶元三年～嘉泰元年）	4	（悟）	（遷）	松本文三郎	「大藏会展観目録」
三	（天童覚和尚語録）	元・至正六年（一二三四六）	4	智	（倫）	積翠軒文庫	「石井積翠軒文庫善本書目」
四	不詳	不詳	不詳	禪永	桂希	現存しない	洞水「宏智禪師語錄補闕因由」
五	宏智禪師広録	江戸・宝永五年（一七〇八）	9	天桂伝尊	駒大図書館	「天桂年譜」 享保書籍目録 宝永五年条	
六	宏智禪師語録	江戸・寛政三年（一七九一）	6	洞水月湛	駒大図書館	宋版との校訂の冠註あり	
七	宏智禪師語録	江戸・寛政三年以降	13	虎丘	不明	「幽谷余韻」	
八	宏智禪師語録	江戸・寛政三年以降		（洞水月湛）	駒大図書館	寛政三年本の重刊本	

西暦以外の（）は不明のもの 順序は刊行年次順

次に各番号ごとにこの表について少し補足説明をしよう。

一、後に泉福寺本については詳しく述べるが、同じ版の日本への将来はきわめてまれであつたと思われる。わずかに目録で私のみたかぎりでは、次の三部である。

藤堂祐範氏蔵本の「普門院經論章疏語錄儒書等目録」略称文和目録、大道自筆本の収の中に

宏智錄 二部各六冊 〔昭和法寶総目録〕 卷三・九六九

b) とか

京都帝国大学蔵の「建仁寺両足院藏書目録」の第四十九番
宏智禪師廣錄七（同九八三、九八二c）

とある。このうち東福寺のものは円爾弁円の将来になる宋版であると考えられるが、建仁寺のものは七巻の意味する内容も不明であり宋版とは異なるかも知れない。⁽¹⁾

二、六冊本の宋版の外に宋版と思われるものに、『禪籍目録』によると松本氏所蔵の四巻本がある。これについては駒沢大學図書館長の桜井秀雄先生にきいたところ松本氏とは松本文三郎博士のことである。京都で毎年ある京都仏教各宗学校連合会の主催の大蔵会展観目録にのつたものという。私はこの目録も実物も現在みることができないでいる。

三、先の四冊本の重刊本と思われるものに元の時代の至正六年智綸による重刊本が現存している。これは川瀬一馬編著の

「石井積翠軒文庫善本書目」の中に写真と解説がある。⁽²⁾この本が現在どこに所蔵されているかは不明で、納富常夫先生を通じて著者の川瀬一馬博士にきいていただいたがわからないとのことである。

四、洞水の「宏智禪師語錄補闕因由」によると永希と禪桂なる人が開版したらしい。覆宋版の五山版であろうか、はつきりしたことはわからない。洞水の語は③として後にかかげる。

五、現在最も流布している宝永五年本である。宝永五年本は、洞水によると天桂伝尊が開版したことになっている。天桂の年譜の宝永五年の条にそのことがしるされているから、⁽³⁾ 宝永五年本と天桂伝尊との関係は事実だろうと思われる。ところでこの宝永本は、泉福寺本六冊に基づきながら九冊とし、また構成を異にした点が大きな問題を残した。

六、寛政三年本で洞水によつて泉福寺本と宋版の永源寺の写本によつて宋版の構成にもどしたものである。

七、『幽谷余韻』卷二に收められた「新刊宏智禪師語錄序」により、その存在が知られるもので、寛政三年本の六冊を二分して十二冊とし、補遺一巻を加えたもので、この本については不明である。

八、寛政三年本の序を除いて、宝永五年本の九冊に組みなおしたもので、寛政三年本には冠注があるが、その冠註と編集

とはちぐはぐとなつてゐる。

ところで宝永五年本は九冊本で、これに基づいて続藏經や大正新修大藏經は刊行されているが、『宏智広録』を考える場合、寛政三年版によつて問題にすべきであろう。もちろん宋版を考察するのが今回の目的でもあるのだから、宋版によるべきことは言をまたない。宝永本と宋版、寛政本については、後に述べることにするが、洞水は泉福寺本だけによつたのではなくて、久米の永源寺の宋版の写本を土台にしている。この洞水がいう久米の永源寺とは、埼玉県所沢市久米一三四二の永源寺であるが、そこに尋ねてみたが現存しない。

結局、泉福寺本にも次に説明するように卷一の最初は欠けているから、寛政三年本によつて富直柔の序や普照寺開堂語は見る以外に方法がないのである。ただ駒沢大学図書館の宝永本は、寛政本の刊行以前の寛保元年辛酉（一七四一）七月二十八日俊昶の書き入れがあるが、そこにはすでに異写本による富直柔の序と開堂語が転写されている。この外面山の師の損翁が宝永本以前に宏智録に注目している点も考えあわせれば、写本もかなり多く存したのかもしれない。ここに特に注意しておることは、宝永本も泉福寺本によつたということと、寛政本は行数・字数は宝永本とまったく同じであり、順序のみが異なるということである。

これらの外に写本として『禪籍目録』には松ヶ岡文庫に十

冊本の永享十年（一四三八）の古写本の「宏智広録」があるとされるが、古田紹欽博士・鎌田茂雄先生の御好意で松ヶ岡文庫を調査していただいたが、文庫の中には存在しなかつた。十冊本がどの系統のものか、内容はどうなつてゐるか不明である。古写本としては、太容梵清（一四九五年寂）の真筆本の「宏智小参録」が現存する⁽⁶⁾が、これは宏智録の別行本で上・下の二巻本になつてゐる点は注意してよい。その外頌古・拈古の別行本も必ずや存在したであろうが、古い写本はみつからない。洞水によると、永源寺写本に道因の跋があり、その中に断俗禪翁が拈古を開版したこと記している。

以上で『宏智広録』の開版及び写本のわかるものを列挙したが、開版本で私のみることのできたものは（泉福寺本・宝永本・寛政本）、すべて泉福寺本の系統のものである。この点論を進める上で別系統のものをみたかったのであるが、現在ではそれができないのが残念である。

ここで『宏智広録』の名称についてつけ加えておくことにする。『禪籍目録』によると広録と語録を別系統として分類してある。この分類は一応理解できるのであるが、語録と広録はもとは同系統のものであつた。つまり泉福寺本六冊を分冊整理して『宏智広録』九冊と名称を変えたものにすぎない。泉福寺本六冊が統一してよばれたのは、恐らく『宏智（禪師語）録』というのであり、『宏智広録』とは呼ばれない。

かつたらしい。また四巻本系統は『天童覚和尚語録』と称されたようであるからあるいはこの方が古い呼び名であったかもしれない。洞水の開版した寛政本にわざわざ『宏智禪師語録』としている点からいえば、永源寺本写本にあるいはこの名称があつたのかもしれない。もともと宋本は六冊本も四冊本も語録としていたようである。後に述べるように泉福寺本の外題は不明であり、また六冊が一度にまとまって開版されたのではなく、語録も天童寺時代三十年の前三分の一しか現存しないから、「広録」としての体系ははじめからなかつたといってよい。語録ということになると、『続開古尊宿語要』の第二集の地の中に「宏智覚和尚語要」があり⁽⁸⁾、また淨啓の重編となる清の康熙十一年（一六七二）刊のいわゆる明の又続藏の『宏智覺禪師語録』一冊四巻がある。これは江戸時代の曹洞宗の人達にも影響を与えたものであるが、今問題にしている宏智録の抜すいで少々後代の資料の新しいものを加えたものである。⁽⁹⁾これによつてわかるとおり『禪籍目録』の分類ではあいまいである。

仏混淆の独特的な文化圏をもち、宗教的遺跡遺物が多くある。泉福寺にも応永元年八月の建築になる開山堂と開山無著和尚墓塔の二基が国宝に指定されている。今からおよそ六百年前の永和元年三月十四日に無著妙融によつて開かれたもので、近年泉福寺本『正法眼藏御抄』は特に有名である。今回問題にしている道元の将来になる宋版の『宏智録』が存在するが、これが実際に道元の将来本かどうか詳しいことはわからないが、⁽¹⁰⁾この語録が宋版であることと、道元と『宏智録』との関係は別の機会で問題にしたいけれども、非常に密接な関係にあることだけはまちがいないところである。

なぜ泉福寺本に注目しなければならないかは、洞水もまた青龍虎法氏もいつていて、最も流布している宝永五年本と順序を異にし、最初が宝永本に欠けているからで、このことは『宏智録』の成立には大きな問題であるからである。論をすすめる大切な事柄であるから、泉福寺本と宝永本と比較しながら泉福寺本を紹介してみよう。

泉福寺本『宏智録』の構成

構成を述べる前に泉福寺本宏智録について簡単にふれておこう。泉福寺は大分県の国東半島に位置するが、この一帯は神

年春に洞水が完成した『宏智禪師語録』がおそらく泉福寺に到り、それによつて三百七十九世住持の遵峰（現在は四百六十七代村上賢明老師）が、裏打補修したものと思われる。卷一の外題の「宏智録一」とあるのも箱書きの表と同筆になるもので、現在はその部分はのりがはげていて、このことから各巻数はわからず、各巻（卷一を除く）の最初に「泉福禪寺塔頭之常住也六巻内」と古筆されているが、この時すでに巻の順序は不明となつていて、その点には言及せずに、洞水は永源寺写本によつて順序を決したらしい。⁽¹²⁾ ところが青竜虎法氏が大正六年十二月に泉福寺本をみられた報告には、卷五と卷六が逆になつてゐる。青竜氏の報告は宝永本からの推則であろうか。洞水は版心に卷五、卷六とはつきり刻しているので間違いないところである。但だ洞水本を宝永本の九冊に組みかえたり、あれだけ苦心して范宗尹の序が卷三にあつたことを洞水は冠注に「比序為天童語録作焉、是故宋本冠第三之首、今從宋本」と示していながら、駒大の寛政三年本はわざわざ卷一にとじこんでいる点などから考えあわせるに、いかに宝永本の影響が大きいかがわかるのである。宝永本は十行二十字であるが、先にも述べたごとく寛政三年本もこれをそつくりそのまま採用している。宋版の行数は寛政三年本の冠注にあるように定つたものではなく、詳細は後に述べるが、十行十八字、十一行二十字、十二行二十二字を基本

にできている。もちろん洞水は泉福寺本を直接見ていないのであり、虎云を通じてただ字句の校訂と編集を宋本に依つたものといつてよい。以上でおおよそ泉福寺本について述べてみたので、次に構成をみてみよう。

さて宏智録でまず問題となるのは、首欠の件である。卷一の二枚半が泉福寺本は欠けている。この首欠は宝永三年本を刊行する時にすでに欠けていて、その点には言及せずに、初開堂の語を省いて、しかも卷三の序を巻頭に移したところに大きな問題を残すに至つたのである。

現存の泉福寺本は、首欠の部分に補筆があり、その補筆は①直柔の序、②普照寺開堂語、③洞水の宏智語録の解説、④虎云禅人の校讎終了所感の偈でできている。つづいて普照寺開堂語の残りの二枚裏と五行の合計十五行があり、受請拈疏（つまり宝永本の最初の上堂語）となる。次に①・②を寛政本を基にして泉福寺本と比較しながら、③は寛政本を、④は泉福寺本の補写をかかげることにする。

①長蘆覺和尚語録序

長蘆覺老禪師、芙蓉楷師之嫡孫、大洪淳公之嗣子。妙齡見道、分半座於靈山。早歲入塵、転法輪於塵刹。縱復弥天之弁、莫當製電之機。或錄微言來求序引。夫楞伽山頂妙絕躋攀、威音世外誰相付屬。入道環之虛

而但知_二尊貴_一、擬_レ之則喪身失命、議_レ之則饒舌傷眉。無象無為、不出不入。須_レ信江淮卷_レ地、木馬嘶_レ風、廬皖倚_レ天、石牛吼_レ月。分職不_レ妨_二郎幕_一、当家自有_二兒孫_一。雖然水泄不_レ通、靈光洞耀、正使_二鄰虛忽起大地全收_一。凡厥搢_レ衣、母_レ勞_レ捕_レ影。

紹興元年十月朔河南富直柔序

泉福寺本製ハ掣、属ハ囁、互ハ牙、即ハ廊、全ハ金、富ハ府（駒大宝永本の書き入れも富）

②泗州大聖普照禪寺語錄

侍者集成編

師於_二宜和六年十月初一日_一、在_二本寺_一開堂。知府大夫度_レ疏与_レ師。師拈呈示云、納僧變通之道、宰官外護之心、尽在_二舉_一處_二圓_一成了也。諸人若向_二這裡_一薦得、可_レ謂破_二微塵_一而出_二大經_一。就_二諸緣_一而入_二三昧_一。其或未_レ然、更煩_二僧_一正大師_二說破。貴_レ使_二一衆共知_一、宣疏罷、師陞座、拈香云、此一瓣香恭為

今上皇帝祝延

聖壽。伏願齊_二天地之蓋載_一、万壽弥昌、順_二陰陽之生成_一、兆民有_レ賴。次拈香云、此一瓣香、奉_レ為_二發運龍圖知府大夫通判大夫、泊合府文武案僚_一。伏願椿松壽考凌_レ雲、秀_レ難老之姿_一、蔡霍心頑奉_レ日有_二不移之志_一、內安_二宗社_一、外護_二弘家_一。又拈香云、此一瓣香、混沌未鑿之前、威音未興之際、祖師保_レ之為_二慧壽_一、納僧伝_レ之為_二心宗_一、綿_レ古迄

今相承不斷、諸人還知_二落_一处_二麼。丹霞法窟曾投_二真子之一籌_一、洪嶺僧林分_二付利生之半座_一、正理人無_二曲斷_一、此心誰敢自欺。奉_レ為_二隨州大洪山第四代淳和尚_一、再酬_レ法乳之恩_上。令_下矢下有_二鼻孔_一底_レ衲僧、各各聞_中茲香氣_上。遂就_レ座、天寧長老白樞云、法筵竜象衆、當觀第一義。師云、若論_二第一義諦_一、生_二諸法_一而為_二之母_一、會_二衆聖_一而為_二之家_一。智不能知、言不能議、衆中莫_レ有_二能宛轉敲唱底_レ衲僧_二麼。出來建化門頭相見。僧問、如何是正中偏。師云、雲散_二長空_一後、虛堂夜月圓。進云、如何是偏中正。師云、白髮老兒羞_レ照_レ鏡。進云、如何是正中來。師云、霜眉雪鬢火中出、堂堂終不_レ落_二今時_一。進云、如何是偏中至。師云、大用現前不_レ存_二軌則_一。進云、如何是兼中到。師云、夜明簾外排班早、空王殿上絕_二知音_一。僧問、於_二一毛端_一現_二寶王刹_一、坐_二微塵裡_一轉_二大法輪_一。意旨如何。師堅_二起_一弘子_二云、這箇是普照弘子。進云、未審微塵裡如何轉_二大法輪_一。師云、蹉過久矣。進云、恁麼則學人禮謝去也。師云、禮謝即得。師乃云、妙靈無_レ像、圓照不_レ遺。融_二古今於一時_一、會_二聖凡於當處_一。是_二儀生成之本、乃万物造化之元。体虛而明、不夜之光燄燄。緣應而準、無私之冉綿綿。宝月破_レ幽、不_レ類_二天空斷滅_一、真機歷_レ化、那隨_二幻妄遷流_一。巍巍堂堂、浩浩蕩蕩、不_レ可_二以_一相取、不_レ可_二以_一事求。唯心証神契

臣奉_レ君也、有_ニ承明之道_一、父就_レ子也、有_ニ撫会之功_一。到_ニ這裡_ニ具眼衲僧還知_レ有_ニ旁參奉重底道理_一麼。良久云、木人夜半穿_レ靴去、石女天明戴_レ帽歸。久立衆慈伏惟珍重。天寧長老白椎云、諦觀法王法、法王法如是。師便下座。』以下は宋版の泉福寺本にみえる。

泉福寺本辨ハ弁(以下同)、堅い堅、燄ハ々(以下同じ用法)、乎ハナシ、宋版乎ハナシ

宣疏罷ノ三字補写ハ細字、良久云、補写・寛政本トモニ細字、宋版ハソノママ。

(3) 宏智禪師語錄補闕因由

斯錄入_ニ我邦_一、實昉_ニ于永平祖_一。豊後州泉福寺、現所_ニ秘藏_ニ宋本六冊是也。識_ニ其巾箱_ニ云、永平高祖将来也。蓋永祖入_レ宋攜來、珍_ニ襲越之祖山室中_一、而後時會戰爭、乃移_ニ之于豐後_一、以遠_ニ燹亡_一矣。竊按宋本既經_ニ星霜_ニ幾數百載、惜夫展転之久。卷首既缺_ニ直柔序及初開堂之一章_一、唯存_ニ其末篇數十字_ニ而已。近來開板名_ニ広録_一者、蓋寶永中螺蛤師、嘗俾_ニ人就_ニ泉福宋本_ニ率爾贍写上_ニ、上梓流行、然而讎對之功闕如。不_レ免_ニ率意_一、間脱落或譌舛_一。攻索不_レ至莽鹵多矣。初以下師在_ニ長蘆_ニ受_レ請拈_レ疏示_レ衆之章_上為_レ首、而不_レ言_ニ豐泉福宋本亦有_ニ殘脫_一。幾乎誤_レ人、且卷首脫_ニ編者名_ニ。是故余疑_レ之者蓋有_ニ年也。質_ニ之有識_ニ、無_レ有_ニ敢知_ニ焉。是故每_レ讀_ニ斯錄_ニ、靡_レ弗_ニ為_レ之嘆息_ニ也。凡理有_ニ窮必有_ニ通、

積_ニ思累_ニ校不_レ知_ニ歷_ニ幾年_ニ耳。既而有_レ人云、武之久米永源寺嘗藏_ニ斯錄写本_ニ。閱_レ之与_ニ現本_ニ大同小異、叙跋亦不_レ同。余聞大喜乃羸_ニ糧而趣、具_ニ陳上事_ニ。主人領而不_レ拒、出_ニ其写本_ニ、手以相示。起而盥漱閱_レ之一過、惜第一冊外毎_レ冊逸_ニ半。但及_レ讀_ニ第一普照禪寺語錄_ニ、果有_ニ直柔序及初開堂一章並編者名_ニ、覽_レ之猶且不_レ審_ニ是同是異_ニ。疑_ニ之者亦三四十年矣。且写本亦惟繫_ニ月日_ニ而不_レ記_ニ年曆_ニ。是以不_レ能_ニ知_ニ其幾年前之古写本_ニ也。水也雖_ニ不敏_ニ慮_ニ後之讀_ニ刊本_ニ者定生_ニ疑著_ニ。因欲_ニ原_ニ之于豐後宋本_ニ、以質_ニ正同異_ニ、因循未_レ果。齒已耳順、保_ニ天年_ニ而歿、恐其噬_ニ臍而已。今茲之春適會_ニ虎云禪伯有_ニ故將_ニ之_ニ九州_ニ、因遠煩_ニ云禪人_ニ、以聘_ニ問乎泉福_ニ、具啓_ニ上件_ニ、懇_ニ請宋本_ニ、鑒訂方成。乃遠致_ニ校本_ニ告云、宋本展転幾乎數百載、第一卷首缺_ニ直柔序且初開堂_ニ。唯存_ニ末篇數十字_ニ。文与_ニ写本_ニ同。水也累載歉念於_ニ是积然。刊本闕如無_ニ以恠_ニ焉。宋本殘脫之後不_レ能_ニ得而補入_ニ焉。其所以不_レ載宜矣哉。蓋七处住山且再住編輯、未_ニ必無_ニ遺漏_ニ。況淨啓重編中出_ニ四転靈機_ニ、真歇塔銘等、宋本率皆逸_ニ之矣。然則一期雜著安得_ニ無_ニ予遺_ニ哉。所以難_ニ目稱_ニ広録_ニ可_ニ知焉。竊按斯錄且真歇劫外錄等、支那湮沒而不_レ行也。古籍中斑斑視焉。嘗讀_ニ天界全錄復_ニ錢牧齋_ニ書上云、吾宏智真歇_ニ祖語錄久已散失、近聞毛子晉居士有_ニ旧刻本_ニ。晉公与_ニ老居士_ニ最是密邇。乞

転致_レ之使_レ得_二重梓_一。又使_三一祖再生而法乳橫_二流於無尽_一

也。又閱_ニ又續藏_一有下名_ニ宏智錄_一者合卷_ニ冊_上。是乃至_ニ乎明武林淨啓_一、奉_レ旨重編以入_ニ于藏_一。視_ニ諸宋本_ニ十二三耳。由_レ此稽_レ之則可_レ知、吾永祖東歸之後、亡_レ何歸_ニ烏有_一、世不_ニ流行_一也明矣。是以元明諸名家、雖_ニ聞生_ニ酢液_一、不能_ニ得而稽_ニ焉。故間有_レ論_ニ五位之宗綱_一、矛_ニ盾_ニ祖範_一為_レ不_ニ少也。洞上闕典就不_ニ嗟嘆_ニ哉。且按永源写本尾、沙門道因跋_ニ之云、天童之語流_ニ于東土_一者、拈古頌古外有_ニ語錄小參法語雜著_ニ凡四篇。拈古則斷俗禪翁既已凋板。以施_ニ學者_一、而語錄等四篇唯宋本_ニ二行而止耳。學者雖_ニ欲_レ閱_ニ之不可_レ得也。有_ニ參學永希者_一、為_レ人精簡少而好_ニ學、嘗有_ニ志_ニ於曹洞宗旨_一、乃与_ニ水周寺主公禪桂者_一、聲氣相應募_レ工重碉。欲_レ使_ニ後來學者資而為_ニ依歸_ニ也。拋_レ此則知斯錄 我邦刊_レ之既久矣。搜_ニ索其旧刻_ニ至_ニ今未_ニ之得_一、以為_ニ歎耳。且恐_ニ後學者不_ニ知_ニ豐之宋本有_ニ殘脫_ニ因托_ニ直柔序且開堂絡索於虎云禪衲_一、以俾_ニ其補_ニ入乎宋鉄本_一。於是鉄本再復_ニ全本_一、喻_ニ之于昔猶璋判今始珪合_一。法運環回不_ニ亦愉快_ニ乎。

若令_ニ祖起_ニ於九原_一、恐其無_ニ遺憾_ニ焉耳。今秋云禪衲來晤話次、謀_ニ補闕於余_一。懽喜之至不_ニ奪_ニ其志_一。乃嘗所_ニ校讐_ニ再加_ニ考訂_一。遺者補_ニ之、訛者正_ニ之、乃以_ニ直柔序並初開堂章_ニ、補_ニ入諸刊本_一。且其所_ニ脫誤_ニ悉挙_ニ之上層_一。不敢奪_ニ前輩之功_一。以圖_ニ流行不朽_ニ耳。

寛政三年辛亥春下浣

光嚴嗣祖洞水謹識

④丁未之秋八月、偶居_ニ泉福精舍_一、賞_ニ貸宏智廣錄_一。於_レ是就_下所藏影室宋本与_ニ現行本_一、併以_ニ校讐其差_ニ誤、今也業畢。聊賦_ニ偈以呈_ニ于 鼻祖影室_ニ也。然其一者拜_ニ禪師_一、其一者謝_ニ校讐賞貸_ニ。云、

幽討_ニ山深_ニ濯_ニ意根_一、寒泉一脈仰_ニ崑崙_一、雨露三草風雲合、水漲_ニ二州波浪奔、掬得幾人知_ニ妙味_一、謁來孤客過_ニ靈源_一、可中澄_ニ目難_ニ窺底、須_ニ入_ニ衆流尋_ニ普門_上。

太白遺書無_ニ大唐_一、全編今尚在_ニ扶桑_一、月中猿切三声句、洞上春濃五色章、雙鎖金針隨_ニ比目_一、貫_ニ通玉線繡_ニ鳶鷺_一、影室真珠開_ニ帳撤_ニ、猶薰相並易_ニ分香_一。

越中散僧 虎云九拜書

①の序者は富直柔で宰相富弼の孫にあたる人であり、泉福寺本の補筆は誤りである。この序が紹興元年十月朔の日に書かれ、天童山にすでに住していたが、この語録が長蘆覺和尚語録として、天童山以前を一まとめにしている点は注意してよい。

②の泗州大聖普照禪寺の開堂語についてもいくつかの貴重な宏智正覚研究の資料を提出してくれる。まずこの語録の編者が侍者の集成になることである。宝永本では「集_ニ成_ニ編」と読んでいるものもあって、侍者の名としていない。この集成は又続藏の所収の周葵の塔銘（両浙金石志卷九が最も古い）

に嗣法の一人として数えられている。次に初開堂の形式が定型化した最も早い時期の記録の一つとみることができる。つまり一、宣疏、二、拈香祝聖、三、拈香文武官僚、四、嗣法香、五、天寧長老白槌（法筵竜象衆、當觀第一義）六、住持垂語・問答・提綱、七、天寧長老白椎（諦觀法王法、法王法如是）がなされているが、『勅修百丈清規』にみられる開堂祝寿とほとんど同一といつてよい。初開堂が宣和六年十月初一日であること。隨州大洪山第四代淳和尚として丹霞子淳の嗣法をすでに三十四才にして天下に知らせたこと。問答に五位觀があらわれていることなど注意してよいであろう。

③に関しては宋版とは関係ないので、またすでに泉福寺本の語は青龍氏の紹介もあることから、この論文に大切である寛政本の文を、少々繁雑であったが記載した。内容については处处に触れたから、ここでは④と関係して、虎云禪人の泉福寺本と流布本との校讎の件について述べてみよう。

③が書かれたのは寛政三年の宏智禪師語錄の刊行の時の文章となっているが、実は同内容のことは虎云が泉福寺に行くときすでに用意されていたといつてよい。洞水が永源寺写本でみた直柔の序と開堂語を泉福寺本に補写するように虎云にたのんだことが、泉福寺本の③の補写に記され、この文が一番最初の洞水の語で、まだ開堂語の三葉（正確は二枚半）の欠けていること知らないで、類推しての文である。泉福寺本

に補写された文の末尾は「天明七丁未季春、越中州富山光嚴嗣祖洞水湛手題」とあり、「洞水和尚語錄」卷十五の「重校宏智錄序」（曹全書語錄五、二五五～二五六頁）とほとんど同内容であるが、虎云が九州に行つたのは、③と同じく寛政辛亥としている点が異なっている。④にも「天明七年丁未之秋八月」の記事があるし、④の偈に次韻したときの洞水の偈が洞水和尚語錄卷八に次のよう

水参考以来、特志乎我洞宗、殆無虛日、雖然疑於宏智錄現本必有脱誤也久矣、越天明七丁未春、偶聞虎云禪伯有九州行、乃使云衲就于泉福影室、拜請宋本、一一併以校讎焉、考訂已訖、特賦二偈、以呈宿意且謝志、客冬遠贈考本、句中惓惓不任欣抃、水亦多載礙膺物、於是积然、乃隨喜之至、今春次韻以遙寄云禪伯云、可中普門、共額名也

跋涉山川最上根、豈辭懸度越崑崙、浮囊何帶渡杯駛、
朽索難維願轂奔、探菜遡流谿水浦、棹槎窮岸澗泉源、
可中撒土趙州苦、吸盡幾人遊普門。
聖代陳篇逸大唐、先賢相贈在扶桑、騰蘭携漢五千軸、
澄海流和數帙章、時到韋編全穀脯、春回錦繡綴鴛鴦、
肯心切恐鬼持鈔、林下生悲太斷腸。

（曹全書語錄五、一三四～一三五頁）
とあることからも天明七年のことであるといつてよい。いつ

のまにか寛政三年の刊行の記事と混同するようになつたらし
い。

以上補写について説明したが、①②の首欠につづいてどの

ような構成になつてゐるかは、次に一覧表としてかかげるこ
とにしよう。

八 尾		一		首欠	ナシ	本宝卷永	卷	首題(○は尾題)	序者名・編者	字行数	丁数	版心	刻者等	備(○は刊記考)
僧堂記	偈頌・(銘)	(小參)ナシ	○長蘆崇福禪院語録終	○長蘆崇福禪院語録終	○長蘆崇福禪院語録終	(長蘆覺和尚語録序)	(泗州大聖普照禪寺語録)	(泗州大聖普照禪寺語録終)	(富直柔)	未詳	(1)	(序)	(紹興元年(二三三)10月)	
1610 字行	"	"	"	"	"	1810 字行	1 25	1 25	1 25	1 25	1 25	1 25	宣和6年(二三七)10月1日	
(77 78)	70 76	55 69	41 54	38 40	30 37	26 29	1 25	1 25	1 25	1 25	1 25	1 25	靖康2年(二三七)4月23日	
"	"	"	"	"	"	"	語録							
		57 丁・建安	53 丁・吳洪	建炎二年(二三八)6月13日	建炎二年(二三八)9月15日	建炎元年(二三七)10月18日								
紹興四年(二三四)春														

	尾九	六	五	四	一首	三	二	
(序)	(刊記)		四		三	二		長蘆覺和尚頌古拈古集序
正 覚	悟比遷開板	王伯庠	比丘普崇集序	中侍者 · 曇像	馮溫舒	普侍者 · 法為	范宗尹	向子諲
18178 字行	1610 字行	"	2212 字行	149 字行	2212 字行	1610 字行	188 字行	"
1	1 7	1 15	1 45	1	2 65	1	1	1 29
序		行	法語	小參	語錄	(序)	未詳	拈古
		□6 丁吳洪、	□13 丁范、	1 10 丁辛建	安洪 1 33 丁 1 2 丁 10 丁 酉	吳35 洪3450 丁 吳40 丁 38 辛60 丁 酉	景吳35 洪3450 丁 吳40 丁 38 辛60 丁 酉	吳·吳、 12 吳洪、 24 丁5 丁
紹興二十七年(二毛)夏安居日	○戊午年(慶元四年)刊	乾道二年(二爻)六月	○嘉泰元年(三〇一)	紹興七年(二毛)除日	○嘉泰元年(三〇一)	紹興三年(二元)11月2日	紹興四年(二三)11月22日	○慶元三年(二九七) すかにみゆ。丁巳□□の四字か
								建炎三年(二元)自悉日 (7月16日)

九	五	天童覚和尚真贊 ○天童覚和尚真贊終	(刊記)	侍者儀
八	七	明州天童山覚和尚真贊偈頌	小師比丘宣開板	侍者儀
六	下	○明州天童山覚和尚偈頌	清侍者、法恭	2011字行
	火	道京・淨覺	"	1字行
		"	"	62
		17 61	12 16	11
		偈頌	下火	真贊
		61丁呉	13 16丁	
		紹興四年(一一〇)春	宣和二年(一一〇)冬二十日	

○紹興二十七年(一一〇)
李端民、王守超、靈岳、冲義、
廿八娘、馮小十三娘子
章、居

紹興六年(一一〇)二月八日

さてこの表からもわかるように『宏智録』六巻は、大きく特色ある魚尾【】卷一・拈古1丁、卷四小參1丁、卷五真贊1丁、他は多く【】かナシ。()は推測かその内容にあたるもの

さてこの表からもわかるように『宏智録』六巻は、大きく刊行過程と内容から三つにわけることができる。甲群(卷一・卷二)乙群(卷三・卷四・卷六)と丙群(卷五)がそれにあたる。

甲・乙・丙群は、本文の行数が、それぞれ十行十八字・十二行二十二字・十一行二十字である。このうち無刊記のものは、卷一・卷六の二つで、卷二には丁巳、卷三・卷四には辛酉、卷四の卷末の戊午、卷五の紹興二十七年の刊記が存在する。但し卷二の38丁の裏は墨がほとんどつかずに泉福寺本はすられたらしく、「丁巳[年]刊」の四字のうち上の二字がかすかに読みとられるだけである。

甲・乙・丙群は、本文の行数が、それぞれ十行十八字・十二行二十二字・十一行二十字である。このうち無刊記のものは、卷一・卷六の二つで、卷二には丁巳、卷三・卷四には辛酉、卷四の卷末の戊午、卷五の紹興二十七年の刊記が存在する。但し卷二の38丁の裏は墨がほとんどつかずに泉福寺本はすられたらしく、「丁巳[年]刊」の四字のうち上の二字がかすかに読みとられるだけである。

卷四の戊午の干支であるが、これは王伯庠の書いた「勅諡宏智禪師行業記」につづいてでてくる干支であるから、行業記の書かれた乾道二年(一一六六)以後に相当することになる。開版者の悟遷についてなにもわからないが、道元の「正法眼藏行持上」に王伯庠の行業記が引用されている。⁽¹⁶⁾この行持上は「仁治発卯正月十八日、書写了。同三月八日、校点了。懷辨」の奥書があるから、戊午の干支は、それ以前で先の理由による乾道二年以後に当るのは慶元四年(一一九八)のみである。

次に卷四の1丁の辛酉、卷3の34・40丁の辛酉および卷二の38丁の裏の丁巳は、表に示したように同じ刻者になるものであるから、辛酉は嘉泰元年（一二〇一）、丁巳は慶元三年（一一九七）とみてよいであろう。さらに推測するならば、卷末について行業記は独立して考えてよいものであつて、十行十六字からみると卷一の僧堂記と同時になつた。つまり卷一・卷二と行業記は慶元三・四年の成立で、卷三・卷四が嘉泰元年、おそらく卷六も同年の成立になるものといえよう。行業記が独立して考えてよいのは、元の智縕の重刊本が卷二の天童覚和尚語録に付されている点からも証明される。

甲・乙両群の刊行は理解できたが、ここで明確に丙群の性格が異なることがわかる。この卷のみは、宏智の寂年にあたるが生前に刊行されている。この卷五には自序が存し、「正覚書」の三文字の真蹟が刻まれている。

内容的には後に詳しく考察するけれども、甲群は天童寺住持以前、乙群は天童寺時代三十年間の前の十年、丙群は天童寺再住（紹興八年十月）以後のものである。この中で問題になるのは、先にあげた僧堂記と行業記の取り扱い方である。僧堂記には次のような記事を含んでいる。

建炎之末、人病「乱離」、湘漢江淮、兵火燔掠、尊宿叢林、
蕪沒十八九、毳衣瓶錫、投棲于東南、四明禪席、素
号「小廬山」、郡東六十里、天童道場、山紆盤而氣幽、松偃

蹇而皮皴、蒼壁附蘿、煙晞而翠膩、孤虹枕澗、埃濯而清揚、予住山之四年、十方來學、雲趨水赴、屋不能容、比丘行深、遠來白事曰、柏庭友于露坐簷宿、殆無尋赤与受単鉢、欲募淨信增大其堂得乎、予領之已、而匠披手林、斧鳴于谷、一年余礎布楹列、梁橫桷攢、棼橑翼張、甍瓦鱗覆、前後十四間、二十架、三過廊、兩天井、曰屋承雨、下無廕堵、縱二百尺、廣十六丈、牕牖牀榻、深明嚴潔、万指食息、超搖容與、謀始于紹興壬子之冬、工畢于甲寅之春、總費紙錢万五千有奇……（以下略）

（大正藏四八・一〇〇c）

この記事によると紹興二年の冬から紹興四年の春までかかつて工事が完成したことになっている。この年月からすると天童山時代の記事が卷一に入りこんでいるかのようであるが、この僧堂記が例外なのである。僧堂記は泉福寺本では卷一の七十六丁の淨樂室銘につづいて、新しい二丁にぴったり刷られていて版心の丁数は不明であつて七十六丁に続くものかどうかわからない。但洞水は僧堂記が終つて次の一行に「宋本記真州長蘆崇福院覚和尚語録偈頌、以此考之則和此偈頌住崇福院作之、写本亦附崇福院上堂尾也」と註しているように、尾題があつたとしている。現在泉福寺本の七十八丁目の裏は僧堂記の文の最後の文字で十行目十八字を終つて、卷一は首欠一枚半あるいは最後の一枚を欠いたのかも

しれない。これから考えると僧堂記は卷一・卷二の開版の時点ですでに卷一に収められることが決していたらしく、内容的にみてこの僧堂記は独立しているから、構成的にも別に取り扱つてよいものと思われる。行業記の特別なことは、宏智寂後九年目に記したものであるから当然のことといえよう。

また備考に示したように主な宏智録中にあらわれる年号をみてもわかるとおり、甲群と乙群の区別は明確で、乙群には天童寺時代三十年の晩年の二十年の記事はみいだせないのである。

宏智録中晩年の記事のあるのは、丙群であつて内容的には真贊のみということができる。丙群には紹興十三年三月十日の土珪の跋文（六代祖師画像贊并引に対する）が付されていゝ外に、宏智の弟子たちが地方で活躍して贊を求めたものが多くある。たとえば「瑞巖石牘禪師塔銘」（攻媿集卷百十）によると、宏智の嗣法の弟子の法恭が紹興二十三年に光孝寺に住すことになつてゐるが、卷五の中に「光孝恭長老写師像求贊」とあるのをみても、晩年の記事が入つてゐることが理解できるであろう。

ここで注意しておきたいことは、乙群に属す卷六の内容である。特に偈頌の中にみられるものの中には、「宣和甲辰歲」や「庚子」の干支がみえる。これは宣和六年と宣和二年にあた

り、卷一の開堂より以前に属する。ここで卷一の偈頌との関係が問題となるが、卷一のものは大聖普昭禪寺開堂より長蘆崇福禪院のものに限ると考えてよいであろう。卷六が紹興六年の記事を含むから、天童寺時代のものはもちろん存在するが、乙群の中で卷六には天童寺以前の記事が存在すること、この卷六はかなり雑編という感が強く、並べられた順序も整理されずに偈頌は収められたようである。

以上で甲・乙・丙の大きく三つに区分できることが理解できたと思う。このことから宋版の四冊本も推測できる。かりに元の重刊本が四冊本の宋版の忠実な覆刻版とする、先に注記したように、川瀬博士の元版の説明には、「第一冊は富直柔序のある語錄（第一冊のみ十行十八字）、第二冊范宗尹の序のある語錄（行業記を附す）、第三冊小參・法語（序あり）、第四冊真贊・偈頌。」とあるから、宋版の四卷とは、おそらく六卷本のうち卷五と卷二を除いたものであろう。あるいは卷二は卷一に附されていて、甲・乙両群の四卷本であつたかもしれない。いずれにしても丙群が全く異った刊行と編集過程でなされていることがわかつた。

このようにみてくると、九卷本の卷末の紹興二十七年に宏智録すべてが成立し、行業記の戊午の刊記の一九八年は、紹興二十七年の重刊版か、行業記のみはあとで加えられたとする従来のあらゆる宏智録の研究、年表等はすべてあやまり

となるのである。もしかりに生存中に出版されたとしても、現存の六冊本の宋版や四冊本の宋版からでは推測できないのであって、その開版は決して紹興二十七年のそれではないのである。

宏智録の形式について

この形式を述べる前に詳しく序者・編者・開版者について述べねばならないが、紙数の関係もあるので、別の機会に宏智の伝記を詳しく述べるときにあらためてみることにするので、ここでは簡単にふれておこう。

序者は、富直柔・嗣宗¹⁸・向子諱¹⁹・范宗尹²⁰・馮溫舒²¹・普崇²²であり、編者は、集成¹⁹・宗法²³・宗榮²⁴・法澄²⁵・宗信²⁶・法潤²⁷・信悟²⁸・行徒²⁹・普崇³⁰・法為³¹・中翼³²・曇像³³・師儀³⁴・清萃³⁵・法恭³⁶・道京³⁷・淨覺³⁸・嗣宗等であり、開版者は智宣³⁹・悟遷⁴⁰を中心にして他に多くの助縁者でなつたものである。

このうち富直柔は宋史卷三百七十五、向子諱は宋史卷三百七十七、范宗尹は宋史卷三百六十二に伝があり、特に向子諱については『文定集』卷二十一に「徽猷閣直学士右大中大夫向公墓誌銘」や他の多くの資料があつて詳しい伝記がわかる。⁴¹しかしながら宏智との関係は詳しく述べられない。ただ樓鑰の『攻媿集』卷五十二に「薌林居士文集序」なるも

のがみいだせるから、向子諱の文集が存在しておれば、さらに詳しくわかるであろう。その他編者序者の嗣宗については、淳熙新安志卷八に「宗白頭」として伝があり、法恭は前に述べたように『攻媿集』卷百十に「瑞巖石牘禪師塔銘」があつて最も詳しい事情がわかる。他は不明か、簡単なことしかわからない。

「行業記」を書いた王伯岸については『攻媿集』卷九十に「侍御史左朝請大夫直秘閣王公行状」があり、『行業記』のもとになった「宏智禪師妙光塔銘」を書いた周葵は宋史卷三百八十五に伝がある。これらをもとに宏智録についてさらに考究してみよう。

さて宏智録が統一された形式をもたなかつたのは、それだけそれぞれの侍者による編集の素朴さを物語るものであるとともに、宝永本が果そうとした広録化への統一が、それでも十分にできないほど複雑さをもつていたといえよう。

それぞれの巻ごとに同じ性格の編による通し番号をふすならば次のようになる。

〔大正藏経でもわかるように、不足の前述の②を別にして、それより以降を1から数えた。以下この通し番号をもつて論を進めることにする。〕

卷一 上堂 165 (但し内小参²と欠けていた②を含む。)

偈頌 33

默照銘

淨樂室銘

僧堂記

卷二

頌古

拈古

卷三

上堂

(但し小参1を含む)

卷四

小参

法語

57

36

307

100

100

勅謚宏智禪師行業記

卷五

真贊

(1を除いて自贊)

卷六 真贊 (内自贊 94)

下火

274

37

偈頌

274

37

坐禪箴

3

銘 (瑞巖山鐘銘并序、本際庵銘、至游庵銘) 3

これらの中から、特に上堂語を先にみた編集や刊行の過程を参考にして、内容の上から検討してみよう。

宏智録のうち卷一と卷三に上堂語が収められているが、その上堂語が果して年代順に収められているものかどうかが、ここに問題となる。ここではこの種の記録が一応年代順にならべて編集されている一般の慣例にもとづいたものというこ

とを一応前提としておく。⁽³³⁾

まず卷一が五ヶ寺に住持をし、開堂法語およびそれに順ずる入院上堂語が、次のように記されているから、大体の予想がつく。

②泗州大聖普照禪寺 開堂法語 宣和六年十月一日

79 舒州太平興國禪院 入院上堂

靖康二年四月二十三日

91 江州廬山円通崇勝禪院 開堂法語 建炎元年十月十八日

114 江州能仁禪寺 入院上堂 建炎二年六月十三日

122 真州長蘆崇福禪院 入院上堂 建炎二年九月十五日

これらをみると、通し番号と年代が順序よくならび住持の順

に編集されていることがわかる。さらには89の「師受江州円通崇勝院請上堂」や90の「辭衆上堂」とか、113の「師於六月初三日退院、辭衆上堂」や123の「師於当月二十九日、就本州天寧寺開堂」からもさらに年代順であることが確かめられる。

また卷三の最初の上堂語は「受請上堂」として、建炎三年十一月初二日と記されているから、卷一とのつづきも理解される。

この外、宏智自身の呼称をみてみると、普照禪寺のときは、「覺上座」(1・2・4・5・17)と一般的呼称が最初の頃は多くみいだされ、後にもこの呼称が少しはみいだされて
も、「普照」(26・35)とあり、長蘆崇福禪院のときは、「長

蘆」(123・130・143・148・157)とある。また卷三は天童寺時代であるから必ず「天童」(16・31・32・80・93・102・109・121・152・160・162・239・251など)とあって、例外は一つもない。因みに卷二の拈古は長蘆崇福禪院時代の作として前に述べたが、ここでも「長蘆」(77・84・92・99・100)とあって、かえつて前述のことが確証される。

さらに上堂の年代順を詳しくみてみることにしよう。上堂であるから卷一の小参以降を除き、通し番号を付した上堂内にみられる卷一の小参二回（2・5）と、卷三の小参一回（28）を含んで考えることにする。また上堂語の場合は、原則的には「上堂」の語が付されているが、例外もいくつかある。たとえば卷一には「開堂」が三回（②・91・123）、「示衆」が二回（1・24）、「陞座」が一回（3）あり、卷三には、「示衆」が二十二回（223・227・231・236・248・252・256・260・263・264・266・268・270・280・282・283・285・295・296・298・299・303）、「陞座」が一回（76）、なにもないものも一回（3）ある。ところでこれらの「上堂」は性質や上堂日を付している場合があり、これによつて上堂の行なわれた年月日を推測できる場合がある。まず宏智録中の四百七十二回の上堂を、一般に上堂日のわかる上堂で整理してみるとする。

(一)三仏忌に関する上堂

1 淫樂上堂	二月十五日	5 (6)
2 涅槃会上堂	十二月八日	
3 瞳八上堂		
4 四大節に関する上堂		
5 結夏上堂	四月十五日	8 8 5 (7)
6 解夏上堂	七月十五日	
7 冬至上堂	十一月	
8 7歳旦上堂	一月一日	
9 上元上堂	一月十五日	
10 閉炉上堂	二月一日	
11 開啓乾隆節上堂	三月十三日	
12 天中節上堂	五月五日	
13 開啓天申節上堂	四月二十一日	
14 天申節上堂	五月二十一日	
15 中秋上堂	八月十五日	
16 天申節滿散上堂	九月九日	
17 (重陽日) 上堂	十月一日	
18 開爐上堂		
19 天寧節上堂		
		ナシ ナシ ↓街坊設乳粥上堂
3 4 (1)	2 1 4 2 1 (2) 2 (3)	
5 (5)		

(四) 特定時の上堂

20 因雪上堂	冬期		
21 街坊設乳粥上堂	十二月八日	1	1
(五) 忌辰上堂			
22 大聖菩薩忌日	三月二日		
		(僧伽和尚の開山忌のこと)	
23 大洪忌日	三月十一日	1	
25 宝峰師叔遷化	一月七日以降	1	
以上の25項目が年月日のわかるものであるが、特殊な上堂として次のようなものがある。			
1 師在長蘆受請拈疏示衆、2 当日晚小參、3 次日辭陞座、4 入寺上堂、5 当日晚小參、14 長蘆書至上堂、41 拳智首座立僧上堂、59 謝都監寺上堂、64 再入院上堂、76 拳宗首座立僧上堂、89 師受江州円通崇勝院請上堂、90 辭衆上堂、92 入院上堂、100 師在東林上堂、107 天池長老至上堂、113 師於六月初三月退院辭衆上堂、118 真州天寧琳長老下法嗣書上堂、119 薦道士請上堂、123 師於当月二十九日就本州天寧寺開堂、130 莊上回上堂、135 資福和尚至上堂、158 拳首座立僧上堂(以上卷一)			
14 真歇和尚入山上堂、22 拳真歇和尚入室上堂、26 請維那藏主知客侍者上堂、27 善權智和尚下法嗣書上堂、28 当晚小參、47 請首座上堂、67 陽山和尚下法眷書上堂、76 范相公入山請陞座、91 請首座上堂、101 請延壽和尚上堂、106 送化主上堂、119 持			

鉢帰上堂、131 尼請上堂、132 請前後堂首座藏主上堂、139 送監收上堂、143 育王聰和尚遺書至上堂、198 請保寧和尚上堂、199 送監收上堂、201 薦福專使馳書上堂、202 陸宣人請上堂、216 鴻福聰和尚入寺上堂、218 送化主上堂、219 到吉祥上堂、221 昌國帰上堂、237 桶頭納疏請上堂、240 送監收上堂、243 沙弥請上堂、246 馮侍郎請上堂、257 送化主上堂、262 幹簾化主請、265 送監主上堂、269 持鉢帰上堂、271 施主看經請上堂、273 下嗣法書上堂、276 送監收上堂、289 真歇和尚入上堂、290 高麗國持牒侍禁斎僧祝寿上堂、294 拳書記藏主立僧上堂、300 送化主上堂、304 供聖施主請上堂(以上卷三)

これらの特殊な上堂も、先にあげた年月日のはつきりわかる開堂法語や入院上堂、受請上堂によつて、前述したごとく年月日の推測できるものもでて年代が確定していくのである。まず卷一の百六十五回の上堂と卷三の三百七回の上堂を、年代のわかる主なものだけ通し番号で示して表にしてかかげることにしよう。

「個々については後に考察するが、一年間の上堂を推定して年代順にまとめたもの。歳旦上堂のない年代の年のかわつた上堂については、今後改めるものも生ずるであろう。宣和六年・七年と紹興三年以降は必ずしもこの表で十分に正確を期すものではない。」

『宏智錄』の上堂の年代順表

宏智禪師の年令(才)		三四	三五	三六	三七	三八	三九	四十四	一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	合計数
上堂日	上堂名	年	宣和六年	宣和七年	靖康元年	靖康二年	建炎三年	建炎四年	建炎五年	紹興二年	紹興三年	紹興四年	紹興五年	紹興六年	紹興七年	紹興八年	
一月一日	歲旦上堂																
一月十五日	寶峰師叔遷化上堂																
一月七日以降																	
三月二日	大聖菩薩忌日上堂																
三月十一日	大洪忌日上堂																
三月十三日	開啓乾龍聖節上堂																
四月八日	浴仏上堂																
四月十三日	乾龍節上堂																
四月十五日	結夏上堂																
四月二十一日	開啓天申節上堂																
四月二十三日	入師於靖康二年四月二十二日 上堂																
五月五日	天中節上堂	*	50	79	110	109	108	106	154	151	(148)	39	35	34	24	63	98
五月十五日	(五月半上堂)															102	139
五月二十一日	天申節滿散上堂															94	
112	111																
23																	
66																	
135																	
182																	
276																	
1	4	(1)	1(2)	1	2	6	2	5(6)	2(3)	2	1	1	1	1	8		

西	上堂の合計数
暦	
1124	6
1125	17
1126	40
1127	35
1128	41
1129	36
1130	30
1131	53
1132	19
1133	54
1134	46
1135	41
1136	15
1137	24
1138	15
	472

() は推定可能なもの、* は年代的に確かでないもの。

このような具体的な上堂から宏智正覚の伝記を補正することができるとと思われる。詳しくは別の機会で述べるが、宏智は山西省の隰州で生まれ、十一才で出家し、十四才で受戒し、十八才で遊方の旅にでている。龍門山で芙蓉道楷の弟子の淨因法成に指導を受け、二十三才のとき丹霞子淳のもとで大悟徹底した。丹霞が大乘山、大洪山に移るに随つて宏智も移り、大洪山で書記をして、子淳が一一七年に示寂するまで従つた。宣和三年に大洪山で首座になつたときは、宏智の有力な弟子の法智、嗣宗等はすでに参隨していた。次の年廬山円通寺で芙蓉道楷の弟子惟照闡提の会下で分座し、宣和五年に真歇にまねかれて長蘆の第一座となる。その翌年の宣和六年の十月一日、泗州大聖普照寺において出世開堂するのである。ここより宏智録は上堂語として記録されている。もちろん入寺以前の受請拈疏示衆もあるし、卷六にはそれ以前のこととも記されていることは前にいうごとくである。

さて宣和六年より建炎三年十一月二日の天童山住持以前の記事は、順を追つて記録されていることは表をみればわか

る。特に侍者がそれぞれ異なり、一二二七年には、太平興国禪院と廬山円通寺と二度住持をかわり、翌年の一二二八年にも、能仁禪寺と長蘆崇福禪院 とこれまで二つの寺に住持しているのであるからこの間において、上堂の順序は記載された順序だと考えてよいと思われる。ただ宣和六年と七年との記事は、この二年間のうちのどちらであるか明確にしがたく、他の参考になるものもない。全体的にみて卷一は年分行持が交錯することもなく、卷一の102の宝峰師叔還化とは、芙蓉道楷の嗣で闡提惟照の遷化のことと、普燈錄卷五には建炎二年正月辛丑(統藏經一三七・五五b)に寂すとあるから、その節上堂の間にあることは年代的に順序通りだといつてよい。

問題のあるのは卷一の64の上堂に「再入院上堂」というのがある。同じ寺に二度住持するのは紹興八年九月に靈隱寺に行き、またその年の十月に天童山に帰えることがあるから、諸注釈書はその時の事柄であろうとしている。⁽³⁴⁾ この紹興八年十月の記事が、この卷一に入っているかどうかであるが、今

まで述べて来たようにそのようなことは考えられない。それでは「再入院」とはなにかというと、この靖康二年の歳旦後に他寺に行き、帰りて入院されたか、あるいはこの上堂の前の上堂は歳旦上堂であるが、歳旦上堂を二度くりかえされたのではないかと思われる。おそらく前者であろうが、因みに

63と64の上堂をみると、

63歳旦上堂。云、木雞報_レ曉、石女歌_レ春。物物咸新、人人

受_レ歲。野老門下、却不_レ受_レ賀、既不_レ受_レ賀。祇如_ニ尊賓父子、如何得_ニ血脉不斷去_一。金針玉線、如何得_ニ相統_一去。還休悉得麼。良久云、転_レ昬_ニ雪消_ニ峯頂白_一、拏_レ頭春

入_ニ燒痕青_一。（大正藏四八・六b）

64再入院上堂。云、脫去還如_ニ鳥出_レ籠、水雲將与_ニ旧來_一同。依稀似_レ曲纔堪_レ聽、又被_ニ風吹_ニ別調中_一。復云、來無_レ所_レ從、去無_レ所_レ至。恁麼行履、十方著_レ你不_レ得、三界轉_レ你不_レ得。畢竟落_ニ在甚麼處_一、還相委悉麼。窣堵波前古寺基、家風清澹還如_レ故。（同六b）

とある。64の「再入院」という表現が適當かどうかわからぬいが、「來無所從、去無所至」などとあって、年があらたまつても仏道の本来の姿にかえつて、怠ることなく修行に励むよう³⁵示衆されているから、再住の意味による必要はないと思

次に天童寺時代のことであるが、天童寺への入寺は補陀洛

迦山の觀音を拝みに行く途中に天童寺が無住になつていて、衆人に請われて住持したとされる。この頃は宏智が書いた「崇先真歇了禪師塔銘」に

建炎二年六月退院。八月絕_ニ錢塘_一、如_ニ明之梅岑_一、礼_ニ

觀音大士_一。海山七百余家、一聞_ニ教音_一、俱葉_ニ漁業_一。

計日活_ニ千萬億命_一。四年過_ニ我結制_一。（續藏經一二四、

三一七b）

とあるごとく、法兄の真歇清了が住持であった。宏智と真歇は周知のごとく深い道交があり、宏智は真歇を訪ねんとしたのであろう。卷六の199と100に「航海之寶陀訪真歇師兄」と題する偈二首に

199至人親見_ニ古觀音_一、化迹今居_ニ海上岑_一、煙樹外分_ニ青嶂骨_一、水天中見_ニ白雲心_一。潮痕擁_ニ岸棲棲雪_一、月魄浮_ニ波爛爛金_一、根境一如能所斷、円通遊踐法門深。

200得得來尋真歇兄、孤舟揚_レ櫓順_レ潮行、重聯_ニ斷雁雲中字_一、遠赴_ニ閑鷗沙上盟_一。新味清油燠_ニ紫菜_一、古方淳蜜漬_ニ黃菁_一、海山只箇供_ニ盤筋_一、一段家風不_ニ世情_一。（大正藏四八・九四a）

とあるのが、その時のことであろう。その後真歇は退いて建炎四年に宏智のところで結制を共にしたことになる。

このような事情の中で宏智は天童山に入ったが、そのためか長蘆の上堂も途中で終つたかの印象を与え、また天童寺

にても受請上堂はあつても開堂法語はない。その当時天童山は金の攻撃もあつてひどいあれ様だつた。宏智が住持して以後、五山の一つに数えられるこの寺を、（まだ五山制度は成立していないが）立派に再興したのである。

さてこの卷三は卷一のよう上堂語が年代順に記録されているであろうか。入寺した建炎三年十一月二日より、先にのべた靈隱寺一ヶ月の住持を除けば、示寂する紹興二十七年十月八日までの天童寺時代三十年の記録のうち何年間の記録が卷三に収められているであろうか。

この問題を解決するために、表の年号は必ずしも正確ではないが、卷一にならつて一年間の上堂を一まとめとして天童寺の入院から一年ごとに仮にあてはめたのである。卷三の記録のうちいくつかは他の資料によつて年代が推定できる。まず卷三の14の「真歇和尚入山」は、前に示した塔銘に「(建炎)四年過我結制」とあつたごとく、建炎四年の夏安居を共にしたときの記事である。卷三では建炎三年十一月初二日に受請上堂し、2に冬至上堂しているから、翌年の夏安居中の記事として考えられ、年代順にはじまつていることは理解できるであろう。

次に76の「范相公入山請陞座」の記事は、卷三の巻頭の范宗尹の紹興二年の序文に

今天童長老覺公、則所_レ謂未_レ言而意已親者、始余被_二罪

南遷_一、泊_二舟廬山之下_一、与_レ師一再邂逅耳、而相与之意、便如_三故人_一、去歲罷_レ相東來、師過_二余於四明_一、余復訪_三之於山中_一、語累日益歎、……（以下略）（大正藏四八・一a）

とあるから、紹興元年のこととみてよいであろう。

紹興二年の年が上堂が少ないのは、この年の冬より僧堂の工事にとりかかり、多忙な日々の勧募によるのであろう。天童山には宏智住持以来多くの雲水が集まり、僧堂が足りずのちには千二百衆となつたといわれ、そのため僧堂を作ることや勧募に費やされたのであろうか。¹⁰⁶の「送化主上堂」や¹¹⁹の「持鉢帰上堂」の種類の上堂がはじめてこの頃からでてくるのも、僧団を維持するための変化を語つてゐるといえよう。

おそらくこの紹興二年という年は、宏智録の中でも大きな区分の一つをなすと思われ、范宗尹が紹興二年望日（駒沢大学図書館蔵本の宝永本には異写に四月とある）に「天童覺和尚語録序」を書いた頃までは確實に上堂語は年代順に記されていたといつてよい。それはおそらく¹¹⁰までであろうと思われる。

¹⁰¹の「請延寿和尚上堂」とは、天童宗珏の「天童大休禪師塔銘」に

侍_レ歇居_二補陀巖_一。道価愈高、郡請_レ住_二岳林布袋道場_一不_レ

就。寵智時ニ天童ニ、視レ歇レ兄、邀歸ニ山間ニ。又命ニ師挂レ牌領レ衆。象山延寿虛席、使君延レ請再三始從レ之。

紹興二年、太守陸公長民、仍遷ニ師于岳林ニ。備レ禮開堂。丞

相范公宗尹、自号ニ退晦居士。与レ師ニ方外交。(以下略)

(攻媿集卷百十・四b~五b)

とあるから、寵智（この表現はこの塔銘には後にも出る）が天童山に住して後、紹興二年の何月かに岳林にて開堂する以前に、宗珏が延寿にいたときのことで、紹興二年の早い時期のことであろう。

ところで紹興二年に一度まとめられ、多忙であったとして

も、翌年より再び従来の行事が行なわれて、上堂の記録もつけられた。ところが紹興五年の記事から、二人の侍者、普崇36・法為によつて編集された卷三のうちのどちらか一人にかわつてゐるようで、それは紹興四年の最後は通し番号で212になるが、そこまではすべて上堂という語で統一した整理がなされているようである。しかしながら223より「示衆」として上堂を表現し、しかも以後二十二回をしめ、勧募の上堂が急にふえる。この紹興五年より紹興八年にあたると思われる部分には大きな疑問が残る。たとえば表からもわかるが、281の天寧節上堂一つをとっても問題がある。これは北宋最後の皇帝の徽宗の誕生を祝う上堂であるが、徽宗は紹興五年四月に崩じており、徽宗の崩御を多くの人が知ったのは遅れること

があつたとして³⁷も、聖節が紹興七年におこなわれることは絶対にないといえる。³⁸特に宏智は天寧節に細心の注意をはらつて毎年上堂していたようである。

次に表では紹興五年となる221の「昌国帰上堂」である。これは卷六の偈頌199・200に「航海之宝陀訪真歇師兄」とか、201の「与昌国善友」と関係あるもので、真歇が補陀洛迦山に住持しているときに訪れたものとするならば、建炎二年八月から建炎三年までのこととなる。天童山から補陀洛迦山へは舟でいけば簡単で、必ずしも真歇と結びつけなくてよいが、結びつけた方が自然であろう。

また表では紹興七年となる269の「持鉢帰上堂」では「乞食浙西蘇与秀、人人奉仏家家富」ではじまるので、卷六の真贊4の「弟子薄堅仁、以幅縫写圓悟禪師像、徑山裕、虎丘隆、二高弟侍焉、紹興丙辰二月八日、予乞食之蘇台過其家、且出以相示、再三有請、輒隨喜贊云」と題する贊と符合し、紹興六年二月八日の記事と思われ、收められた上堂の最も後のもの一つであろうと思われる。

また紹興七年にあたる289の「真歇和尚入山上堂」であるが、すでに建炎四年のことは、14や22に記されているから、別のことと考えてよい。しかしながら宏智は真歇の塔銘に建炎四年のことは記しながら、他にそれ以後のこととは述べていがない。建炎四年は結制を共にした長い期間であつたから記し

たとすれば、真歇はそれ以後は福建省で活躍するから、紹興六年の十月四明阿育王山に入寺し、七年蔣山に行くまでの間の出来事であろうと考えられる。

その他紹興五年にあたる²⁴⁶の「馮侍郎請上堂」も、紹興七年に小参語録の序を書いた参学の馮溫舒と思われるから、一年・二年の差はあつたとしてもこの頃のものといえる。年月日まで確実な他の資料が後半で今のところみいだせないのは残念である。

以上、天童山時代のものは例外はあるとしても、歳旦、結夏、解夏、冬至の四大節を中心として毎年くりかえされる年分行事より考えて、一応年代順に並べられていると理解してよい。

この種の研究は一つ例外を認めると、多くが疑問を提せられ、都合のよい部分だけを年代順にすることになつて、二重の誤ちをおかすことになりかねない。ただ今までみてきたどうり、紹興四年までは少くとも順序を追つていると思われる。その後の紹興五年以降は多く整理されずに書きとめられたようである。さてそれでは卷三の記事は何年まであるかということである。先に刊行について考えたようにまず丙群の卷五を除くことにして、他の五巻の記事の中で最も古い明記された年号は、小参の序の紹興七年の記事である。次にふるいものは紹興六年の二月八日の記事であり、これはおそらく

先に考えたように、卷三の通し番号²⁶⁹に相当するものと思われる。このように考えていくとするならば、²⁹³の歳旦は紹興八年のものにあたると考えてよいのではあるまいか。それゆえ紹興八年の十月の再入院以降のものは、天童寺時代の上堂の卷三にも存在しないことになり、現存六巻本の宏智録の性格は、今まで考えられたようなものではなくかなり素朴なものを持つてゐるといえる。

おわりに

『天童寺志』卷八に紹興戊寅四月つまり紹興二十八年に書いた安定郡王の趙令衿の「勅謚宏智禪師後録序」というのがある。この後録がいかなるものか不明であり、あるいは従来考えて來た宏智録以後にまとめられたものがあつたのであるか。趙令衿は宏智と深い関係があり、また圓悟の弟子である。ただどうした訳か宏智の伝がすべて一年ずれている。この序をもつ古い文献をみるとことができないし、このような課題をもちながら今後さらに問題を考察せねばなるまい。

ただ『宏智録』六巻について大体のことは述べて來た。たとえば宏智の思想上重要とされる『默照銘』は卷一にあるから天童寺時代以前の作で、おそらく長蘆時代になるもので真歇との関係はますます強くなるとともに、多くの年表にしる

されていよう、亡くなる前の年に大慧宗杲の批判に答えて作ったというようなことには絶対にならないことがわかつた。

また「天童覚和尚の頌に云わく」で有名な頌古・拈古は天童山時代の作ではなく、普照寺時代に頌古が、長蘆時代に拈古がすでにできあがつていた。

これを基礎にしたさらに研究を続けて行かねばならないが、大慧との関係など重要なものの一つであろう。二人の関係は亡くなる頃は非常に親しいあいだであった。⁽⁴⁰⁾ 紹興二十六年十一月二十三日、大慧が報恩光孝寺で開堂したとき、宏智は白権師をした。⁽⁴¹⁾ またその開堂のときのお礼にその年の内に、大慧は天童山を尋ねてしている。さらに天童寺志卷八では宏智が推薦することによって大慧が阿育王山に住持したことになつていて、宏智が大慧に後事を託したことも史実である⁽⁴²⁾。淳熙新安志卷八の「宗白頭」の伝では、宏智の弟子の嗣宗にも大慧は賛を付している。

これらの問題を含めて宏智派の動きなどまだ解決しなければならない多くの問題があり、やつと研究の一歩が踏みだされたような気がする。今後の研究をさらに充実させたい。

最後に宏智禅師の研究は酒井得元先生の指示によるところが多く、また小坂機融先生、泉福寺住持村上賢明老師にも大変お世話になつた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

註記

1 洞水月湛の寛政三年本の最初にある「宏智禪師語錄闕因由」は後に全文を紹介するが、その中に明末の『天界全錄』に記されている宏智語錄とは、この宋版か、元の重刊本を意味するのである。

2 川瀬博士の説明によると

「天童覚和尚語錄」四冊

元至正六年刊、左右雙邊、有界、十二行二十二字、匡郭内、縱五寸七分五里、横三寸七分五厘、第一冊首に至正己丑如砥の序（一葉）、紹興元年富直柔序（一葉）を附し、（第一冊のみ本文十行十八字）末に「至正丙戌孟春七世師孫比丘智綸慕緣重刊」（以下多数の助縁者名を附刻す）があり、第二冊首に紹興壬子范宗尹の序（一葉）を附し、行業記（十行十六字）（七葉）の末に「任德章周中山刊」の刊記、第三冊（小參・法語）序一葉あり、第四冊（真贊・偈頌）の末にも第一冊と同じ智綸重刊の記及び多数助縁者名（各冊異なる）等を附刻してある。各冊首に「環溪」等の朱印記を捺す。（永平久我環溪禪師旧藏）裏付補修、大いさ縦八寸、横五寸二分

とある。また一冊目の本文の一枚目の写真があり、まったく泉福寺本と同じものである。他に助縁者名を刻した写真がある。

3 玄端の書いた『退藏始祖天桂和尚年譜』の（宝永）五年戊子（一七〇八）年の条に「師六十一歳、偈獲^三宋本宏智和尚語錄、乃点考以付^三韋闡氏^二刊行焉、蓋原本出^二豐後泉福寺之宝庫^二云」

（曹全書史伝下、卷一七・四五八頁）

とあり、宝永本も泉福寺本をもとにしている点とさらに他に宋本宏智和尚語錄を見ていて、しかも広録としている点は注目すべきである。

⁴ 『幽谷余韻』卷一の「新刻宏智禪師語錄序」によると次のようにある。

吾洞上之為禪也、正偏以為宗綱、功勳以為宗趣。回互奉重、精妙綿密。修于無修、証于無証。寥廓深遠、迴殊諸家。故曰、諸宗稱為三了當者、吾宗方許入門、不其然乎。雖然陽春白雪、亦間有和焉者。得一二於千百、以伝其譜、而嫋嫋乎不絕矣。方下趙宋中、彼其一種時行之禪、泛濫江湖、而其子弟、乃世搢紳先生、為之簷鼓、恰如桃李爛漫、亂于春風之秋。不肯以三法充人情。不敢以三禪語資中談柄、岌岌乎若一髮引千鈞、而使宗綱不墜于地、宛若干載古松、不媚艷陽、不萎霜雪、矯矯雲外、而有不可製玩之風韻。者、宏智正覺禪師其人也。當時推尊号隱州古仏、良有以也。古仏七坐道場、橫說豎說、整麗婉曲、攢花簇錦、金声玉振。乃能幹三旋仏祖不伝之機軸、磅礴教論不詮之淵源、夫其造次顚沛、一嘵一唉、未嘗不歸正偏回互、功勳奉重玄旨。故道不明、而學不博、則莫知其語句所拋。學雖博矣、而道不明、則莫究其旨趣所歸。於戲洞曹二祖之後、接其簷袞、壇之美者、古仏一人而已矣。世之欲之數者、未得其所、以言、而強言之、釣餌摸擬、以稱洞上言句。譬諸剪綵之花、

⁵ 5 面山の書いた『損翁老人見聞宝永記』には、「師曰く、宏智禪師は光前絶後の大善知識か。永平祖師、詞を窮めて讚歎す。其の讚歎する所以は、禪師、坐禅篋を作りて云く、仏仏の要機、祖祖の機要と。……」（永福面山禪師選集二二六頁）とか、

「師示して曰く、昔宏智禪師、仏祖正伝の打坐を主張して、默照の銘を作る。」（同、二一八頁）とある。面山が師の説を受けたさらに『建康普説』の第九に「默照普説」を説いたことは有名なことである。この中で損翁は宝永五年本をしらず、おそらく宝永元年頃これらの説を述べていたと思われる。

6 酒井得元博士の影印本を覽させていただいた。その奥書きには次のようにある。

「丹波州滝見玉雲禪寺藏開山太容清老和尚真蹟宏智小參錄記」揚子曰、言心声也。書心画也。声画形、君子小人見矣。雖則見矣、背触俱非。如「大火聚」但形「文彩」即屬「染汚」。价祖之所指斥非乎。以我觀之、此之謂「心生滅門」猶尚不有「心真如門者」乎。文彩未^レ痕、初消息難^レ伝際、覺祖之所^ニ親切著明^上也。其惟曰、夜半正明、天曉不露、為^レ物為^レ則。用拔^ニ諸苦、雖非^ニ有^レ為^ニ不^ニ是無語、始可^ニ與^ニ言^ニ心之声画。而後機絲不^レ掛^ニ梭頭^ニ事、文彩縱橫意自然、書以尽^レ言、言以尽^レ意、固世教俗談之、所^ニ戸說曰用而不^レ知也。丹波州滝見玉雲寺、以^ニ古蹟雄刹、崇祀太容清老和尚^ニ為^ニ開山祖。實為^ニ鋪草創業之基緒^ニ也。此鄰有所^ニ隸屬^ニ德雲寺[。]蓋當時同門之所^ニ繼創、而^ニ傳藏^ニ太容真蹟^ニ許多。余有^レ旧所^ニ及^レ觀、自^ニ真歇劫外錄、宏智小參錄、国字古鈔及永平正法眼藏全套、乃至^ニ祖室古訓秘訣、拋古淳真、

應^ニ是正^ニ見行流布[。]而明楷謹嚴、想^ニ見毫端光明射^レ人者、手沢具存焉。若乃於^ニ玉雲宗室[、]猶且崑岡望^ニ診藏[、]歆羨不^レ啻、嘗

乱離所^レ歷、散軼懸罄、絕無^ニ赫蹄之存^ニ隻字[、]尚古之孤、不^レ無^ニ歎惜^ニ也。系^ニ法派^ニ者、則自詰^ニ罍耻[、]慨焉久矣。適會^ニ有^下告^ニ州之龜山土家藏^ニ宏智小參錄正文真蹟一本^ニ者[。]並^ニ觀比^ニ質於^ニ德雲所^ニ存。即無^ニ疑似^ニ矣。於是雲仍之室^ニ通棠蔭[。]見住^ニ德雲長老默笑、南陽長老心丈、竜沢長老江月、輒唱^ニ義合^ニ貲[、]請而贊^ニ之。新鮮裝飾、奉以藏^ニ諸玉雲大廟[、]上騎^ニ恩庇[、]下報^ニ宿歎^ニ也。遂寄^ニ書洲菴[、]而請^ニ紀以徵^ニ傳來[。]僧參受而列^ニ叙所論[、]因持^ニ此說^ニ竊謂、比本之可^ニ伝寶貴^ニ焉。曷第宏智覺祖親言所^レ説、而太容清老真蹟所^レ書、獨以^ニ声画之形見^ニ而已哉。夫正法眼藏、涅槃妙心、靈山付属而後、嫡嫡密授。至^ニ吾洞山价祖[、]二門施設、宛轉圓明、伝^ニ之其人当家種草、僅有^ニ真歇宏智嗣^ニ徽音[、]並薦同輝、千古一時、宗說其選也。但三百年前、則^ニ錄刊本之未^レ布^ニ比方^ニ焉。固大声希音之、不^レ入^ニ里耳^ニ焉。殊有^レ所^レ見、為^ニ尚而淑艾、抄而謄写[、]太容之具眼折法、無^レ有^ニ乎爾[、]則亦無^レ有^ニ乎爾[、]亦唯想^ニ見靈苗瑞草、同心同德、惟夫其身有^レ之云、然則今之奉以藏^ニ諸大廟[、]价祖亦有^レ言曰、徒觀^ニ紙与^ニ墨、不^レ是山中人。又曰、言語不^レ通^ニ眷属[。]僧參為^ニ比本三復、重點堯毫光[。]所以相^ニ微俾^ニ雲仍無^レ所^ニ苟而已^ニ矣。

明和七年庚寅夏五
角鹿州庵主僧參謹記

曇照敬書

どともみえる。この小参録には前掲の川瀬著に「天童覚和尚小

参疎山大師根脚七道一冊。室町末期写。天童覚和尚小参は首若干を欠き、毎半葉十四行附訓、墨附十葉疎山大師根脚七道は別

筆で……」ともあり、別行本の小参録のあつたことがわかる。また峩山紹碩にも「宏智小参註脚」があつたという。

7 このことは後述の③に述べる。なお宏智録の研究書に次の五つが主なものとして存するが、すべて宝永本の註釈書及び研究書である。これらの研究はいずれ後日を待ちたい。

- 1 鳥飛魚行 二十三冊 瞠道本光
- 2 宏智禪師広録聞解 一冊 面山瑞方
- 3 宏智録別考 五冊 写本 著者不明
- 4 宏智禪師広録事考 七冊 斧山玄鉢
- 5 宏智録事義 四冊 寂然惠空編

8 『古尊宿語録』の研究に関しては最近柳田聖山教授によつてすばらしい研究成果が発表された。「古尊宿語録考」（花園大学研究紀要第二号）。この中で推測された「古尊宿語要」四策と「続刊古尊宿語要」六策なるものが、天理図書館蔵の十八巻で現存する。この天理本は永井政之氏（大学院博士課程）が雲門広録研究のため駒沢大学図書館にファイルムを移録してもらい現在駒沢大学図書館でみることができる。十八巻とは各策が二分され、最後の星・辰が二分されないものである。但「続刊古尊宿語要」はほとんど補筆されている。なお宮内庁書陵部の覆宋版五山版の破本五冊が天理本と同系統である。今後古尊宿語録

はさらに研究が進められるものと思われる。

9 面山瑞方の「建康普説」の大慧との関係などはその一例である。

10 各冊ごとに朱印があるがそれが読みとれなかつた。他に「謹山主」なる印もある。この伝承等については不明であるが、書誌学を専門にする方の解説を願いたい。道元将来の宋本も多く存したであろうが現在見られるのはほとんどなく泉岳寺にある「左伝集解」がその一つで現在存する。小坂機融先生に拝覧を願つて実際にみることができた。宋の淳熙年間の刊で十巻、帙に入り、久我通久候が旧蔵していたもの。道元が生家久我家へ土産として米元章楷書法帖と共に贈つたもので、久我家で代々重宝として大切に秘蔵されていたもの。刊記に次のようにある。
謹依監本寫作大字附以釈文三復校正刊行如履通衢了亡室礙處誠可喜矣兼列図表于卷首述夫唐虞三代之本末源流雖千歲之久豁然如一曰矣其明經之指南歟以是衍伝願垂清鑑淳熙柔兆涇灘中夏初吉閏山阮仲猷種德堂刊
朱印には源章踊印とある。

11 柳田教授の前掲論文に『古尊宿語要』について「刊本は縦十六・六センチ、横十一・三センチメートル、原則として毎半葉十二行、毎行二十二字という小本である。竹庵士珪のいうように、従来の本は型が大きすぎて、包裏のうちに入れて携帯するのに不便であつた。いうならば、鼓山の本はポケット版であり、文庫本のさきがけである。それは普及と正確を第一とし

た。」とあるように、宏智録もあとで述べることく行数・字数からも考えて古尊宿語要と同じ種類のものに属している。因みに今いう古尊宿語要は紹興八・九年の刊記をもち、柳田教授の推測では紹興十四年頃に二十二巻が完成したとしている。

12 本来の宋版はどうであったか不明であるが、卷五真贊、卷六真贊・下火・偈頌と真贊を卷五・卷六の二巻に分散して一応の体系化をめざしたと思われ、恐らくその逆ではあるまい。

13 范宗尹の序の一枚が卷三にあつたことは元の重刊本によつても知られるが、卷一の普照寺語録が一枚目から始つており、卷三では版心に二とあるから当然卷三の最初に序が用意されていたはずである。

14 虎云禪人は注4に示したように虎云郁繡、竜山虎云ともいひ。芝白金丹波町の松久寺過去帳では、廿二世海林郁繡とし、文政十一年（一八二八）四月七日に示寂したことになつてゐる。著書に「四節引導抄」「覺変陀足」「龍華菴云和尚語録」がある。すべて駒沢大学図書館に蔵している。但語録と名があるけれども、一般的の語録とは異り、大拈香之部、小拈香之部、薦疏之部の三部よりなり、拈香法語を中心としている。これらることは語録に付されたメモによつた。メモは小川靈道氏のものである。

15 洞水和尚語録卷九にも

「寛政四子春赴^二請東都禪鑾^一。提^二唱於天童宏智語録^一。△前年改^二正斯錄^一。補闕已畢。▽路經^二過信州^一。乃謁^二嚴千丈和尚^一。

打^二巴調^一以呈上。」（曹全書語録五、一四一页）とあり一偈がよまれている。なお洞水語録の中には宏智録のことが非常に多くみいだせる。

16 『正法眼藏』行持上に

「太白山宏智禪師正覺和尚の会に、護伽藍神いはく、われきく、覺和尚この山に住すること十余年なり。つねに寢堂にいたりてみんとするに、不能前なり、未之識也。まことに有道の先蹟にあひあふなり。

この天童山は、もとは小院なり。覺和尚の住裏に、道士觀・尼寺・教院等を掃除して、いまの景德寺となせり。師遷化ののち、左朝奉大夫侍御史王伯庠、ちなみに師の行業記を記するに、ある人いはく、『かの道士觀・尼寺・教寺をうばひて、いまの天童寺となせることを記すべし。』御史いはく、『不可也、此事非僧德矣。』ときの人、おほく侍御史をほむ。」（筑摩書房、一三二一頁）

とある。なお宏智録と道元の関係については、鏡島元隆博士「道元禪師の引用經典・語録の研究」（木耳社昭和四十年十月）や石井修道「真字『正法眼藏』の歴史的性格」（宗学研究十二号昭和四十五年三月）及び「真字『正法眼藏』の基づく資料について」（曹洞宗研究員研究生研究紀要第三号昭和四十六年十月）など参照。

17 周葵の塔銘によると

「嗣法者、嗣宗、法智、世釗、道林、法潤、信悟、法為、慧

輝、了默、師秀、行徒、宗栄、法聰、清華、正光、集成、圓

法、濟明慧、中翼、法恭、子靈、師儼、師全、覺照、法海。皆

於諸方、坐_二大道場」。

とあり、侍者の多くは活躍していることがわかる。

18 卷五_一二の「雪竇宗長老_二寫_二師像」、以授_二天童知事_二、壁龕而掛之乞語。書其上……「(大正藏四八・一〇二-a)とある。

19 卷六_一七_二の「成侍者_二求_レ頌」(同、八七c)とある。

20 卷五_一六の「清潭榮長老_二寫_二師像」_二求_レ贊」(同、一〇二-a)とある。

21 卷六_一五の「法澄上人出_二長蘆了師兄_二書_二像_二求_レ贊」(同、七九a)とある人であろう。

22 卷五_一三の「大寧悟長老_二寫_二師像」_二求_レ贊」(同、一〇二-a)とある。

23 卷六_一六の「從首座畫_二予於松右間_二求_レ贊」(同、七九a)とある人であろう。

24 卷六_一一〇〇の「仗錫為長老_二寫_二真_二求_レ贊」(同、八二-b)とある人であろう。

25 卷五_一八の「能仁翼長老_二寫_二師像」_二求_レ贊」(同、一〇二-b)とある。

26 卷六_一一六〇の「以_二荷學土韻示_二像侍者」(同、九七b)とあり、卷六_一一〇一の「像維那_二老病阿_二師像」_二請_レ贊」(同、八二-b)とある人であろうか。

27 卷五_一五の「保福萃長老_二寫_二師像」_二求_レ贊」(同一〇二-a)とあ

る。

28 卷五_一七の「光孝恭長老_二寫_二師像」_二求_レ贊」(同、一〇二-b)とあり、すでにこの人については述べた。

29 「宋東谷無尽灯碑」は「紹興二十八年正月 日募緣直歲僧

智宣、山門監寺沙門惠璋、住持伝法沙門法為立石」(兩浙金石志卷九)とあるから、智宣の活躍は多くのことに及んだと思われる。因みに「大用庵銘」は『兩浙金石志』卷八に「門人慧暉立石」とあり、「宋宏智禪師妙光塔碑」は「紹熙二十九年七月望日住持嗣祖蓮姪比丘宗珏立石」とあって天童宗珏の立石となつていて、その外卷八・四三a-bには次のような興味深い碑がある。

宋小天童山施財米疏碑

大宋國常州宜興縣成任鄉常富里居住奉_二三寶_二弟子吳憲、謹施_二淨財壹千五伯貫文足、米氏伯碩_二、入_二明州天童山景德寺_二、營_二建寢宮一所、鳩茲勝刹式_二、薦_二先考六十大夫、先妣宜人呂氏五十八娘子、先兄知府少卿學士超昇_二、仏界右恭惟_二三寶_二即知謹疏。紹興十年三月 日 弟子吳憲疏

30 「鴻慶居士集」卷三十二・一三aには「鄉林銘」がある。なお卷二の後序は當時有名な話として伝えられており、「行業記」もこれを受けている。

31 『攻媿集』卷百十の「雪竇足菴禪師塔銘」には、師因造_二宏智室_二、動輒深契。二十四年、遂擧住_二棲真_二。隆興二年、移_二定水_二。侍郎趙公子瀟、聞_二師名_二、屬_二侍御王公伯庠_二、

製^レ疏。備開堂礼^ニ嗣法大休^一。寔曹洞十一世孫也。

とあるから、宏智の晩年と雪竇とは関係があり、雪竇の開堂のとき王伯岸と関係があつたことがわかる。

32 『宝慶四明志』卷九、三六^a～三七^aの正覚伝の最後に

有^ニ語錄真贊諸集^ニ、伝^ニ其徒^一。

とあるのは、真贊を独立のものとしてみている点で注意してよい。

33 この種のすぐれた研究に秋重義治博士の「永平広録考」（九州大学哲学年報一九輯、昭和三十一年）がある、以下の所論は

この論文を参考にした。

34 この天童山再住の年代は『望月年表』『禪宗編年史』などは建炎三年説にしている。これは普灯録の年号省略を早い時期と見誤ったもので、あきらかにまちがいである。

35 この卷一の五ヶ寺の上堂中で『宏智録』に記されていない記事で興味あることは、長蘆への住持に関して圓悟が斡旋していることである。ちなみに圓悟語録の一一二八年にあたる中秋上堂の二つ前に「請長蘆覺禪師上堂」というのがあり、その中に「復云、撞著道伴交肩過、一生參學事已畢、今朝幸遇^ニ大導師」（大正蔵四七・七四六^a）とのべ、宏智を高く評価している点は注目すべきであり、さらに「一生參學事已畢」という「正法眼藏弁道話」のなじみ深い言葉がでてくるのも興味深く感じる。

36 比丘普崇集序の法語の序には

廓^ニ沖明之鑑^一、而洞照不^レ遺。發^ニ玄極之機^一、而^レ信彩必中。

具^ニ正眼^ニ濟^ニ洪弁^一者、有^レ是哉。師居^ニ太白峯下^一、竜象蹴踏、鎌鑿敲擊、辭意漫演、罔^レ不^ニ精到^一。或士庶這^レ道、而叩^ニ其方^一。或雲水分衛、而請^ニ其訓^一。列^ニ素于前^一、走^レ筆而應。即^ニ名字^一而說、隨^ニ詰問^一而對。故為^ニ之法語^一。摭^ニ其一二、聊以編次。噫蒼蒼之虛、洋洋之流、曾莫^レ造^ニ其淵極^一。茲姑紀^ニ其錄^一。當候^ニ妙契神悟者、擊^レ節而賞音^ニ焉。（大正蔵四八・七三^bc）

とあるから、あるいは普崇の方が先の編集をなし、天童を継いだ法為がかなり多くのものを集めようとしたものであろうか。

37 金に虜われた皇帝の存否が當時すぐにわからなかつた。宮崎市定博士「南宋政治史概説」一五八頁以下（「アジア史研究」第二所収、東洋史研究会、昭和三十四年八月）

38 紹興九年（一一三九）にあたると思われる大慧普覺禪師語録卷二に「徽宗皇帝大祚上堂」（大正蔵四七・八一九^a）がある。

39 超然居士といい、圓悟とともに長蘆への住持を勧めた人である。弟の趙令詵は特に宏智と深い関係をもち、宏智の葬儀を主さざつた人で、天童山の経済的援助をした人でもある。超然居士との関係は、卷六十四^aに「超然居士、得得問^ニ道於寶峯祥師」。且欲^レ歸^ニ歌長篇、以謝^ニ予偕^ニ其行^ニ見^レ挽、以^レ和瀆^レ筆、說^レ句繼^レ之。」（大正蔵四八・八六^b）とあり、また卷六一六一に「次韻超然^ニ折桂覺大師^ニ兼簡^ニ方丈老^一。」（同、八七^b）とか、卷六一六二に「借^ニ雪竇韻^ニ送^ニ超然居士趙表^ニ、時在^ニ泐潭^一。」（同、八七^b）とあって偈頌が付されている。

41 「大慧普覺禪師住育王広利禪寺語錄 卷五」の「師紹興二十六年十一月二十三日、於明州報恩光孝禪寺開堂」（大正藏四七・八二九b）の条。

42 同「到天童請上堂」（同・八三〇b）の条

43 同「天童覺和尚遺書至（上堂）」（同、八三三c・八三三a）の条。その他宏智の伝記に多く記されている。なお大慧語錄の考察は近々のうちに発表したい。

44 大慧普覺禪師語錄卷十二に「天童覺和尚」（同、八六〇b）の贊があり、嗣宗に対しては、

徑山果少所許可、嘗贊^レ之曰、太湖三万六千頃之渺茫、即師之口也。洞庭七十二峯之峭峻、即師之舌也。不動口不饒舌、已說未說今說當說也。也大奇也大奇、此是吾家真白眉。

と絶賛している。また早稲田大学図書館蔵の宋版の「大慧普覺禪師語錄」一冊は道謙編による「大慧宗門武庫」と関係があるがその中にも「萃長老写宏智禪師与師相對像求讚」とあり
両眼對両眼、各檣^ニ一片板、合^レ得^ニ無鎧^レ鱗^ニ会^レ悟^ニ遲晚^ニ傍觀有^ニ人敢定當、許^ニ伊曾喫^ニ大重胆^ニ。

と偈を作っている。「大慧宗門武庫」に関しては別の機会に發表を予定している。

付記、「宏智録」の巻数は泉福寺本によつたが、便宜上大正藏経本で頁数を示した。

（一九七一・一二・一五）

なおこの稿成つて後に、『東方宗教』に『攻媿集』にみられる

禅宗資料——投子義青の法系を中心として——と題して論文を発表することができた。『湖北金石志』の報恩、守遂、慶顕、道楷、徳淳、慶預の塔銘と、『攻媿集』の宗珏、智鑑、法恭の塔銘の外に、『北山小集』（四部叢刊続編本）の法成の塔銘や『石門文字禪』の法燈の塔銘を中心に、湖北省の大洪山で活躍する曹洞宗の禅僧について述べ、ついで北宋の滅亡とともに、曹洞宗の動きが南方に移り、子淳の弟子において特に正覚の天童山、清了の雪峰山で大きな集団となり、宗珏、智鑑において維持されてきたことをながめてみた。

なかでもこの論文であきらかにした

丹霞子淳（一〇六四一一一七）（三月十一日寂）

天童宗珏（一〇九一一一六二）（八月上浣の翌日寂）

雪竇智鑑（一一〇五一一一九二）（八月 日寂）

の三人はほとんど伝記が不明であったが、十一～十二世紀の曹洞宗はあらためて考えてみる必要ができたと思われる。あわせ参照されたい。最後に諸資料の便宜をはかつて下さった鎌田茂雄先生と大谷大学の柄川隆道氏に、ここに記して感謝申し上げる次第である。